

## 2020 年度草木染塾 第 2 回

F I Tの皆様、7月1日、第2回草木染塾が開催されましたので報告します。

【タイトル（開催日）】2020 年度第 2 回草木染塾（2020 年 7 月 1 日）

【場所】川崎市黒川青少年野外活動センター

【実施概要】草木染の基本講義とキブシの実（五倍子）・トチの実・クチナシの実を、染液づくりから染め上げまでの一貫した作業を行う

【スタッフ】講師：奥村具子、助講師：中野修平、矢吹佳枝

【受講者】古谷一祐、林公康、横井行男

【報告者】横井行男

### 【本文】

今回は「キブシの実」「トチの実」「クチナシの実」が課題。液づくりから染め上げるまで一人で作業するよう朝一番に指示が出た。作業の手順について復習を行い、染液づくりの担当が決まる。

クチナシは無媒染で、トチの実・キブシの実はアルミ媒染と鉄媒染で行う。

午前中は、染めの材料づくりとして、現地調達したたくさんのキブシの実を軽くつぶす。まだ青味の残る未熟なトチの実を数個（約 100 g）やはり軽くつぶす。クチナシの実（約 80 g）は半分にかットして準備終了。水を各々の実に対し“10 g で 1 ℓ”の割合で煮だす。クチナシはまだ水の状態から赤味帯びた黄色の色が出始める。あの茶色いトチの実は煮だすと赤い色が出始める。キブシはまだ色がわずかしか出てこない。こんなに色の出方に違いがあることを感じる。また、煮だしたトチの染液を“バケツ返し”という手法で空気中にさらすと、染液が酸化してみるみる赤味を増してくる。

草木染サンプル（ウール、木綿、濃染剤処理した木綿、絹の 4 種類）を染液に 10 分浸けて水洗いする。その内、トチとキブシに浸けたサンプルについては、アルミ媒染液及び鉄媒染液にそれぞれ 20 分浸けて発色の変化を確認する。次に、レーヨンのストールをクチナシの染液に浸け、次回に行う藍と重ね染めをする準備の為、各自工夫して黄色のデザイン染めをする。

午後は、バンダナの木綿（濃染剤処理）をトチ染液で、又、絹の生地をキブシ染液で染める。バンダナを折りたたみ、デザインを考えながら洗濯ばさみで挟んで、赤く酸化させたトチ染液に10分浸けるとピンク色に染まってくる。アルミ媒染液に2分浸け水洗い後、再度トチ染液に浸けるとより濃くなった。洗濯ばさみで挟んだところが面白いデザインで模様が現れてきた。次に、絹を“浸し染め”でキブシ染液につける。染液に2分浸し水洗いをして、また染液に…を繰り返すとき、浸す時間に差をつけると、濃さの違う紫がかかったグレーのグラデーションとなった。染色の楽しみがわかり、持参してきた“軍手やエコバック（木綿）”もクチナシできれいな黄色に染まった。軍手は、一部に化繊が入っているため染まらず、思いもよらぬ綺麗な縞模様となった。出来た作品を鑑賞したが、2回目でもあり、皆さん楽しいデザインの作品が出来上がった。

興奮冷めやらぬ中、「古代の衣生活・カラムシと木綿の歴史」の講義を聞き、木綿が藍染めでよく染まり発展してきたことを知る。

次回9月開催までに時間がある為、自宅での染織の宿題が出され、忘れないよう頑張る。

今回も、想像以上の色があらわれ、植物の生命力を感じ取ることができた。人工的な色と違う微妙な色具合に、草木染のこれからの授業が楽しみになってきた。

以上



トチの染液の「バケツ返し」



クチナシ染液と草木染サンプル



トチ染めで左から無媒染、アルミ媒染、鉄媒染

キブシ染めで上からアルミ媒染、鉄媒染



トチ染め 洗濯ばさみでどんな模様が出るのか？



ピンクのデザインが完成！